

密着

ていね夏あかり

今年で14回目を迎える「ていね夏あかり」。たくさんの手作りちょうちんが夜を彩る手稲の夏の一大イベントです。13年前「区民が主体となり参加できる祭りを」と考えた北海道工業大学の教授とそのゼミ生たちによって始められました。学校、企業、団体、児童会館など多くの協力のもと今年は7月24日に開催されました。

何千個というちょうちんが作られるまでは多くの準備作業があります。これを担っているのが北海道工業大学の学生です。その中心メンバーのひとりである、4年生の工藤由香さんに同行し夏あかりが実施されるまでの過程を追いました。



中心メンバーの工藤さん

事前の作業

6月初旬、広場に飾られるちょうちんの配置が学生たちのコンペにより決められます。配置が決まると早速、手稲駅自由通路「あいくる」に展示するパネルや模型の作成班と、ちょうちんの材料である和紙や針金を決まった大きさに切る班に分かれ、平行し多くの作業が進められます。材

料作りを担当した工藤さんは「今までも祭りを手伝ってきましたが、この作業は初めて。単純な作業がこんなにあるとは思いませんでした」と驚きを話してくれました。



模型作りとあいくるでの展示

一緒に作ろう

工藤さんたちのちょうちん作りの指導に同行し曙児童会館を訪れました。工藤さんは初めて指導したときのことを「作業のペースがバラバラな子どもたちに戸惑いました」と振り返ります。しかし、この日は工藤さんの分かりやすい説明でみんなとても楽しく作業を進めていきます。

「作り始める前にできるだけ話しかけコミュニケーションをとるよう心掛けています」と経験から学んだ指導のコツを話してくれました。

「普段接することのない子どもたちと触れ合えることが楽しいですね。去年は自分が教えた子どもに会場で声を掛けられとてもうれしかったです」と工藤さん。最後に並んでお礼をする子どもたち。「当日会場で、自分のちょうちんを探してみましよう」と優しく呼び掛けました。この訪問指導を通して多くの学生が地域との交流を深めます。

真剣に取り組みます



上手にできるかな？



大垣直明教授

実行委員長
北海道工業大学

祭りを立ち上げた北海道工業大学の教授は、「ていね夏あかりは、子どもたち自身がちょうちんを作り、展示・点灯することで夢と感動を与え、手稲への愛着を育むことを目的としています。きっかけは区民がより主体的に取り組める祭りはないかと考えたこと」と振り返ります。そこで考えたのが子どもでも作ることができ、安く、しかも明るく灯るちょうちんでした。また祭りが、なお拡がり続けている理由を「小さいうちから集まり、火がともったときの感動、地域や企業の支援、さらに祭りを通して地域と子どもが交流できる点ではないか」とその特徴を語りました。

